都道府県別賞一等

もしもの時を支える我が家の保険

長崎県　長崎市立三和中学校　一学年

久保　璃莉

「生命保険」という言葉を耳にする時、私は遠い大人の世界の手続きのように感じていた。自分の生活にどう関係しているのか、考えたこともなかった。しかし、ある出来事が私の見方を大きく変えた。

実は、我が家が保険に助けられたのはこれが初めてではない。一昨年の二月から三月までの二カ月間、私が小学五年生だった時、父が足をケガして手術のために入院した。その時も母は「生命保険があるから大丈夫。」と言っており、父はお金の心配をせずに治療に専念できた。当時の私はよく分かっていなかったが、あの時も私たちは保険という大きな存在に守られていたのだ。

そして八月末、父は再び手術をすることになった。病名は左腕の良性腫瘍「ガングリオン」だ。以前も一度、しこりの中身を抜く治療をしたが、再発して今度は大きなしこりが二つに増えていた。中学生の私にとって「手術」や「三日間の入院」という言葉は重く、一昨年の足のケガの記憶も重なり、急に強い不安を覚えた。大黒柱の父が仕事を休むことや、手術・入院費がいくらかかるのか、家計への負担が心配になった。

不安になり、母に「お父さんの手術代、大丈夫なの？」と聞いてみた。すると母は「大丈夫。若い頃から生命保険に入っているから、かかったお金を後から出してもらえるんだよ。」と言った。難しいものだと思っていた生命保険から、前回のケガだけでなく、今回もお金を出してもらえる。その事実を聞いた瞬間、それまで無関係だと思い込んでいた生命保険が、急に私たちの暮らしをすぐそばで守ってくれている身近なものだと強く実感した。

安心した後、リビングで父に「どんなしこりなの？」と尋ねた。父が左腕の袖をまくって見せてくれた。驚いたことに、そこには硬い塊が二つもぽこりと突き出ていた。触るとコリコリとしており、以前より重症に見える。このしこりが神経を圧迫して痛みがあったため、一度に二つを切除して三日ほど入院するのだという。さっき生命保険の話を聞いていなければ、私は再び不安で押しつぶされていただろう。「この治療を支えてくれる生命保険がある」と知っていたからこそ、私は落ちついて父の腕にできたしこりを見つめ、前向きに手術を応援しようと思えた。

父の度重なるケガや病気をきっかけに、生命保険が一気に身近になった私は、その仕組みを自分で調べてみた。分かったのは、生命保険の本質が「みんなで

助け合う」精神にあることだ。日本には「相互扶助」という言葉がある。たくさんの人が少しずつお金を出し合い、大きな蓄えを作っておく仕組みだ。そこから病気やケガで困っている人に必要なお金を届ける。つまり、父が受ける手術や入院の費用も、全国の誰かが支払ってくれた保険料に支えられている。自分が健康な時に支払うお金が誰かの生活を救い、逆に自分が困った時には社会全体に救われる。生命保険は社会全体の〝優しさのネットワーク〟なのだと知って深く感動した。

父の手術と入院は今月末に迫っている。緊張はあるけれど、お金の心配をせずに父の体を一番に労わることができるのは、両親がもしもの事態に備えて用意してくれていた生命保険というお守りがあるからだ。普段、不自由なく暮らせている日常の裏側には、両親の深い愛情の支えがあったのだと気づかされた。私はまだ中学生で、家族を経済的に支えることはできない。しかし、家族の愛情の深さと社会の助け合いの仕組みを理解することはできた。今月末の手術の時には、父が安心して治療を受けられるよう、家の手伝いなどをして精一杯のサポートをしたい。正式に大人になって社会に出た時には、今度は私が誰かを支える側になりたい。毎月の生命保険を通して誰かの〝安心〟を支えられる大人になること。それが父の左腕から学んだ、私の目標だ。